市川房枝
生誕一〇〇年記念復刻

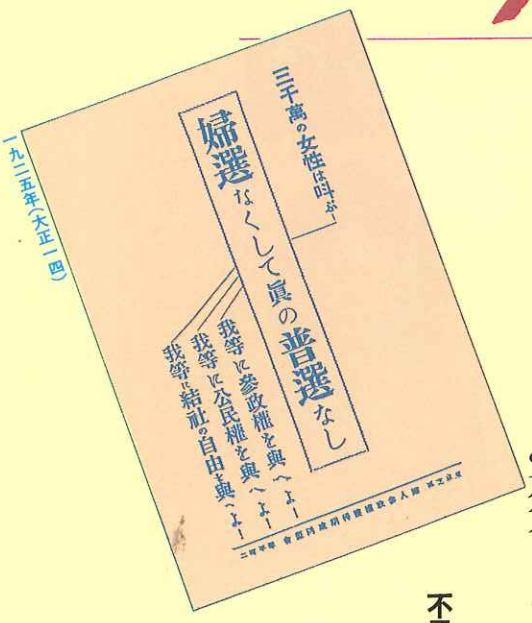
戦前、女性には
選挙権がなかった——
近代女権運動の中心的存在、
婦人参政権獲得運動の
歩みを記録する
機関誌【婦選】
待望の復刻！

市川房枝・編

婦選 ふせん

●全一九巻・別冊一
一九二七(昭和二)年一月～一九四二(昭和一六)年八月

本体揃定価29万5,000円



近代女性史研究に必須の資料

不二出版

婦人参政権運動の中心的存在としての『婦選』——復刻にあたって

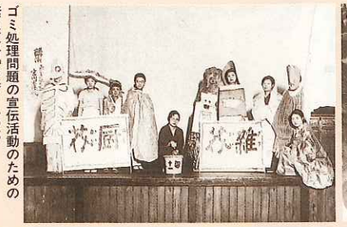
日本で最初のフェミニストとされている岸田俊子の演説を例にとるまでもなく、明治初期・自由民権運動期には、政治運動に積極的に参加する女性が数多くいた。しかし、まず地方政治そして国政への女性の政治参加が禁じられ、やがて一八九〇年、集会及政社法によって政治結社加入と政談集会参加が禁止される。清水紫琴などは強くこれを非難し、婦人矯風会も反対の運動を起こすが効なく、この規定は一九〇〇年の治安警察法第五条に引き継がれ、女性の政治的自由は封殺された。

これに対し、今井歌子ら平民社の女性や岩野清子らは第五条改正請願運動をおこない、さらに平塚らいてう・奥むめお・市川房枝らの新婦人協会が運動を展開することによって、一九二二年ようやく改正案が議会を通過、女性は結社権を除く政治運動の自由を手にした。しかし、一九二五年に成立する普通選挙法の「普選」からも相変わらず女性は排除されており、選挙権・被選挙権は女性についてはまったく認められていなかった。

新婦人協会の活動と治安警察法改正によって弾みのついた女性政治運動は、一九二四年末、市川房枝・久布白落実らによって、婦人参政権獲得期成同盟会(翌年婦選獲得同盟に改称)の結成にいたる。また、「普選」実施以後、運動の主体は無産政党にまで広がり、一九三〇年には各地から各層の女性が参加して、第一回全日本婦選大会が開催され、また婦人公民権案が衆議院で可決される(翌年貴族院で否決)など、運動は高揚する。一九三一年の柳条湖事件以後ファシズム時代の到来の中、一九三二年には全日本婦選大会で反ファッショ決議がなされ、時流への抵抗もするが一方、活動の比重を母子保護法制定・選挙粛正・ゴミ・ガス料金値下げ・魚市場独占反対等の運動に移してゆき、次第に「女性の社会進出」というテーマを体制にからめとられる形となり、一九三七年には国民精神総動員への協力体制を強め、婦選獲得同盟も一九四〇年にはついに解散、翌年には機関誌である『婦選』も廃刊される。

本誌は、婦選運動の中核となって参政権・公民権・結社権の獲得を目指した婦選獲得同盟の機関誌として一九二七年、創刊された。日本近代の女権運動として最も大きなうねりをなし、時代の影響を強く受けながら、一六年にわたりさまざまな展開をみせた同盟の様相をよみとることのできる本誌は、敗戦後ようやく手にすることのできた女性の公民権・参政権のもつ意味を現在も問うている。

財団法人市川房枝記念会の全面的協力を得てここに全号に「婦選獲得同盟会報」を付し、日本近代女性史の基本文献として復刻するものである。



ゴミ処理問題の宣伝活動のための素人芝居「お春さんの夢」一九三三年(昭和八)

選挙革正リーフレットの配布一九三〇年(昭和五)

婦人参政十周年記念漫画 長谷川町子 一九五六年(昭和三一)

第七回全日本婦選大会 一九三七年(昭和一二)

市川房枝略歴

一八九三(明治二六)年、愛知県に生まれる。県立女子師範学校を卒業し、教員生活ののち名古屋新聞(現中日新聞)の記者となる。一九一九年、新婦人協会を創立、二年後に渡米。二四年に帰国、婦人参政権獲得期成同盟会(翌年婦選獲得同盟と改称)結成に参加する。三〇年、同盟の総務理事に就任、婦人参政権運動の先頭に立つ。三七年国民精神総動員中央連盟調査委員となる。

一九四五年八月二五日、戦後対策婦人委員会を結成、婦選を要求。新日本婦人同盟(のち日本婦人有権者同盟に改称)創立、会長に就任。四六年婦選会館竣工。四七年公職追放、五〇年追放解除。五三年第三回参院選で当選。七一年に一度落選したものの、以後死去する八一年まで参議院議員をつとめ、売春防止法制定、理想選挙推進、冤罪究明、女性の地位向上、汚職議員への不投票、政治浄化等の運動に携わる。

●本文見本 創刊号(一九二七年一月号)

婦選

昭和二年 一月號 第一卷第一號

婦選の發刊に際して

久布白落實

一

『婦選』の字は、大正十三年度の總會の當時より用ひ始めて私共の會報であり、且つ又報告であり、主張である婦選を三號まで發行した。

然しこれは即ち所謂會報、報告であつて、之れを會の機關誌と爲すまでの發達を見る事が出來なかつた。今年の總會で月刊誌發行の議が成り、保證金の準備まで略整つたにも拘らず行きつ戻りつ中々發刊の運びに進まなかつた。然し終ひに時來つて昭和二年一月、更めて月刊機關誌『婦選』第一號と銘打つて、我が婦人界に送り出す事は、云ふ可からざる歡喜と感謝である。

二

明治維新の大改革は、王政の復古より始め、三百大名を一掃し、四十萬の士族の壘を破つて四民平等の制を施き、終ひに立憲君主政體の下に、津々浦々の國民まで、三百萬の有權者によつて、國政に參與するに到り、最近五十議會に於て、十數年の懸案なる普選の制は施かれ、一躍、一千二百萬即ち我が國の一人前の男子は悉く政權に參與する時代を此處に現出するに到つた。今日我等の前に殘された問題は、即ち、この一千二百萬の一人前の男子の半身たる、他の一千二百萬の一人前の女子を如何にするかと云ふ事である。特權が小數者から、大數に、權利と責任が同じく小數者から大數に擴大せられ、分布せられ行くは、人類發達の大道で天下の大勢は滔々として大河の決する如く、何人も之れを止むる事は不可能だ。一千二百萬の一人前の男子が、勇敢に立ち上つて大工、左官の別なく國政參加の任務を負ふ今日、我々一千二百萬の一人前の女子も、妻たり、教師たり女工たる別なく、同じく立つて各自其軛の一端を荷ふは當然の事ではあるまいか。

三

過日國際聯盟の新任政治部長杉村陽太郎氏は云はれた。『英米諸國が共代表者中に、マダムグラットストーンの如きボンドフヰールドの如き、國際的に重きを爲す女性を有し、國際間の幾多の難問題の間に、其獨特の力を發揮せしむるに!』と。我國の女性は家庭に於て、其良人より半身たるの信頼を受けてゐる。今や新たに立ち上りし一千二百萬の一人前の男子は、己が半身なる又時により善き半身なる、勤勉忠實なる半身即ち殘れる一千二百萬の一人前の女性に向つて、この我等の大なる家庭即ち國家の世帶持ちに共に立つて一半を擔へと其奮起を促さないであらうか。箇々として、人の生死、衣食、衛生、教育等、人間の有ゆる生活の全部に參加し得る女性は、其家庭の集團なる、人間生活の一段廣き國家に於て、相共に立つて、この大規模の國民的生活の全部に參加し得ぬ理は有り得ない。國民的に眞劍に軛を負ひ得る婦人は何等恐るゝ處なく、又憶する處なく、國際的の難局に處するであらう。世界は今日僅かに六十一國の國民集團で、國際聯盟はウオールドホームの縮圖ではないか。

四

『婦選』は殘れる我國の一人前の女子この一千二百萬の女性に向つて、囁きかける聲である。新に立つた一人前の男子、一千二百萬と共に、我等の愛する偉大なる國家日本の世帶持ちに、我等も立つて其當然の責務を果さうではないか。彼等と共に軛の一半を負はうではないかと囁きかける聲である。世界列國環視の前に、國民生活の大世帶を張つて行かねばならぬ將來の日本には、東洋豪傑流の男子のみに其全部を委ねる事は出來ぬ。奥屋敷にも、裏庭にも、大氣の通ふ、光の照る清々しき國民生活を打ち立てゝ行かねばならぬ。婦選の聲は小さい。然し天來の眞理と要求を語る細ほき小さき聲である。新しき義務に向つて將に目醒めんとする女性の大衆は帶引き締めて、奮明の曙に立たうではないか。

祝婦選發刊

折しもあれわが日の本の春の日に唱ひ擧げ初めよ
をみなごの群
をみなごのこゑは細くも澄み透りいや澄み透り
空に擧らん

岡本かの子

をみな子の生命の道にかゝはりある國の會ひに
まゐらんものを
をみな子にをみなながらの願ひあり天つ日のもとに
共にありつゝ

山田邦子

時代状況と「婦選魂」

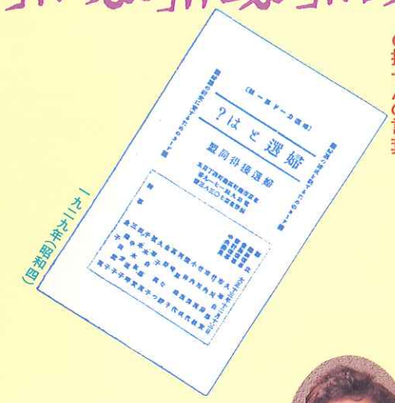
もろさわ ようこ…歴史家

戦後、占領軍による軍政が敷かれていた当時、婦人教育を担当するアメリカ人女性が各地に配属され、その地において指導的な発言をしていた。北陸婦人の集会が金沢で開催されたときのことである。「日本女性はある朝、目をさましたら、枕もとのお盆の上に婦人参政権がのっていた」と、石川県軍政部のアメリカ人女性がスピーチをした。

民主主義を指導理念としていても、当時の占領軍は権威・権力の権化である。人びとは恐れつつしんでその言葉をうけたまわるのが一般的風潮であった。ところが集会参加者の中から一人の女性が立ち上り、「それはちがいます。私どもは長い間、婦人参政権を要求して運動をつづけ、いまようやく手にしたのです」と、きっぱり異議を申したてた。

権威・権力におもねらず、「困難とたたかって荊棘の道を拓くのが私達の仕事」と婦選運動に生涯をささげた市川房枝は言い、そのような精神の位相を「婦選魂」と彼女は名づけている。婦選運動は大正デモクラシーの思想潮流の中に生れ、昭和期の軍国主義勃興に抵抗しながらも、やがて時代状況の中に埋没している。

PKO法の成立により、不戦を国是としてきた戦後の状況が大きく変質させられたいま、「婦選」は歴史を拓く「鍵」であったのか、女たちはきびしく問われている。このとき、『婦選』とその改題誌『女性展望』の復刻は、先輩たちの抵抗と挫折に学び、「婦選魂」を今日的に復活させるよすがとして、その意義すこぶる大きいはずである。



●推せんの言葉

「婦選は鍵」の全体像把握のために

伊藤康子…中京女子大学教授・愛知女性史研究会会員

ようやくようやく『婦選』が復刻される。律儀に最初から最後まで婦人参政権獲得運動にかかわる記事で埋め尽くされた機関誌と会報を、私たちも律儀に読むことができる。女性解放の歩みを確認する日本女性史研究発展のために嬉しい。

市川房枝・児玉勝子の労作で、『婦選』は部分的に活字になり、婦選運動の大筋も把握できるようになっている。しかし、「手一杯の人々の寄合」で支える「婦人一般の一致した婦人運動であり度い」(久布白落実「本会の創立より大会まで」会報第一号)婦選運動は、広い裾野があったから、中央の活動も燃え、社会的評価も高かったのである。地方活動家の声、モップ一本の寄贈も個々の入会者も明示した機関誌に、「婦選は鍵」と、思想信条宗教貧富をこえて動いた当時の女性の、毛細血管の流れを全体として見ることができる。

「骨を折って、金を出して、それで悪口をいわれ、いい所は皆人にさらわれ」(市川房枝「婦選魂」八巻一号)でも、反事大主義、大衆におもねらない婦選運動をすすめ、女性も日本の主権者になる道を築いてきた有名無名の志は、どういうものだったのか。経済大国、生活小国、女性の地位の低い日本の現在を、女性も主人公の社会に変えるために、復刻される『婦選』から学ぶものは多い。

世界のフェミニズム運動の一環として

バーバラ・モロニー…サンタ・クララ大学準教授〈USA〉

市川房枝と婦選獲得同盟が担ってきた日本の女権運動には、目を見張る歴史がある。女権運動には婦人参政権運動・労働運動・母性保護運動そして廃娼運動などいろいろな面があるが、それはまた戦前の政治浄化の問題と国際化の問題とも結びついていた。市川と婦選獲得同盟は運動の中でこの主張を強く進め、『婦選』『女性展望』誌上にその考えを展開していった。

日本の女権運動は国際的にも重要であり、世界各地に起きていた女性運動とは類似点と同時に相違点をもっている。幸いなことに日本の女性運動家たちは『婦選』『女性展望』を通じて、一九二七年から一九四一年における彼女たちの考えや女性運動の意味の変化をすぐれた記録として遺してくれたのである。

これまでとくに外国で研究する者にとってこの貴重な資料を手に入れることはむずかしかった。不二出版の本誌の復刻はその意味でも大歓迎である。今回の復刻によって市川房枝と同盟の仲間たちが世界的な女権運動においていかに重要な役割を演じたかが明らかになり、女性学の幅広い研究を一層可能にするであろう。

日本の女が今、世界から求められていること

土井たか子…衆議院議員

「市川房枝」といえば戦後生まれの人たちは、「出たい人より出したい人を」のクリーンな選挙を思い浮かべることでしょう。たしかに政治浄化の運動は戦前から市川先生が熱心に進めていたものです。が、先生の本領はなんといっても「婦選」すなわち女性に参政権をという、今からすればごく当たり前の、しかしついに日本国憲法を持つまでかなわなかった女性の権利をかちとる運動にあります。

戦前、女は一人前の人間とはみなされていませんでした。自由民権運動以来の宿願だった「普通選挙法」でも女は対象外でした。だからこそ無産婦人から良妻賢母を標榜する女性教育家まで広く女たちが選挙権を求める運動が燃え上がったのです。

敗戦後、日本国憲法によって女性はやっと政治に参加する権利を得ました。そして女が政治の主体になることによって、私たち市民が中心の社会を作り、今度こそ二度と戦争を起こすまい、と強く願い、誓ったはずです。しかし残念ながら国政レベル市町村レベルを問わず、いまだ女性議員の数は圧倒的に少なく、また日本は今回ついに自衛隊の海外派兵を強行してしまいました。

市川先生や婦選獲得同盟の先達が残してくれた婦選運動の轍は、希望とともにファシズム体制への統合という挫折と苦渋をも刻んでいます。私たち今生きる女たちが何をなすべきか。今こそ『婦選』をひもとく意味があると思います。

婦人参政権運動の歩みを辿るために

縫田曄子…ジャーナリスト・(財)市川房枝記念会理事長

女性に関する情報や研究が、一部の研究者や活動家だけでなく広く一般の生活者にとっても貴重なものとして数多く流通するようになった昨今、職業生活の大半を取材活動にかかわってきた私は、深い感慨を覚えることがあります。そのような中でも私たちの先輩が手がけた記録、資料に今も新鮮な格別な重みを感じることがしばしばあります。それらを再び世に出す努力を続けてこられた不二出版がこのたび『婦選』を復刻されることは、多少ともこれにかかわりを持つ者にとって大きな喜びです。

『婦選』は日本の婦人参政権運動に先駆的な役割を果たした婦選獲得同盟が市川房枝を編集委員長に一九二七(昭和二)年、機関誌として発刊し女性に対する政治教育も目的に掲げました。

その後、戦時色の深まる中で一般女性を対象にした内容に変わりやがて廃刊となりましたが、戦後、婦人参政権実現を記念して設立された財団法人婦選会館(現市川房枝記念会)発行の『婦人展望』には『婦選』発刊の精神が引きつがれています。

市川房枝記念会は、一九九三年五月一五日の市川房枝生誕一〇〇年を記念し、一九九二年五月一五日から市川房枝と婦人参政権運動に関する出版・展示等記念事業を行っていますが、この時期に『婦選』が復刻され、日本の婦人参政権運動の歩みがさらに広く伝わり、女性の政治参加、地位向上への新たなはずみとなることを期待しています。

不二出版刊行の関連図書

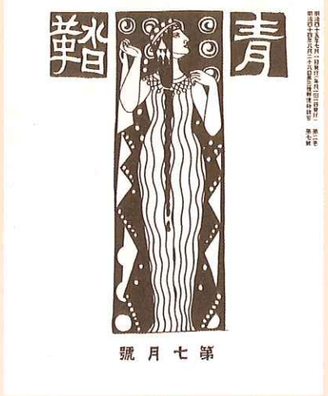
平塚らいてう・伊藤野枝＝主宰

青鞜

―総52冊・別冊1 品切

○明治44年～大正5年刊
○別冊＝解説（井手文子）・総目次・索引
○A5判・並製・函入・総8、824頁
○本体揃価格＝120、000円

「元始女性は太陽であつた」（平塚らいてう）「山の動く日来たる」（与謝野晶子）で知られる『青鞜』は、女性の自我・家からの解放を求め、近代日本の女性解放史の原点となつた。



尾竹一枝＝主宰

番紅花 さふらん

―全2巻

○大正3年3月～8月刊
○解題（渡辺澄子）・総目次・索引付き（特装版のみ別冊）
○菊判・総1、408頁
○本体揃格価＝18、000円（上製合本版・函入）
35、000円（各号並製特装版・帙入）

青鞜社を退社した尾竹一枝が、小林歌津、神近市子らとともに創刊した本誌は、東西の音楽、演劇、美術の紹介等、尾竹の初々しい興味と個性がいきた「純芸術雑誌」である。

日本キリスト教婦人矯風会＝刊

婦人新報

―全60巻・別冊1

○明治21年～昭和33年刊
○別冊＝解説（五味百合子）・総目次・索引
○菊判・上製・函入・総30、000頁
○本体揃価格＝600、000円

日本で最も古い歴史をもつ女性団体＝日本キリスト教婦人矯風会の廃娼運動・婦人参政権運動など人権・女権運動の轍を辿る基礎資料。

福島四郎＝主宰

婦女新聞

―全68巻・付録2

○明治33年～昭和17年刊
○付録＝①「婦人界三十五年」②記事・執筆者索引
○本体揃価格＝1、000、000円

公娼廃止・母性保護・女子教育・婦人参政権など女性に関するありとあらゆることを四二年の長きにわたって報道し論じた貴重資料の復刻版。

戦前女性運動［雑誌・機関誌］の系譜

一八八五（明治一八）　九〇　九五　一九〇〇　〇五　一〇　一五　二〇　二五　三〇　三五　四〇　一九四五

文学・思想
- 女学雑誌（1885～1904）
- 青鞜（1911～16）
- 女子文壇（1905～13）
- 家庭之友（1903～08）
- 世界婦人（1907～09）
- 番紅花（1914）
- 婦人文芸（1934～37）
- 輝ク（1933～41）
- 女人芸術（1928～32）
- 婦人戦線（1930～31）
- 婦人之友（1908～）
- 婦女新聞（1900～42）

政治・女権
- 女性同盟（1920～1922）
- 女性展望（1936～41）
- 婦選（1927～35）
- 女性改造（1922～24）
- 職業婦人（1923）
- 婦人運動（1925～41）
- 婦人と労働（1924～25）
- 民衆婦人（1928～32）
- 婦人戦旗（1931）
- 働く婦人（1932～33）

労働
- 友愛婦人（1916～17）

キリスト教
- 婦人矯風会雑誌（1893～95）
- 東京婦人矯風雑誌（1888～93）
- 婦人新報（1895～）
- 廓清（1911～45）
- 女子青年界（1912～44）
- 明治の女子（1904～12）

長谷川時雨＝主宰

女人藝術

―総48冊・別冊1・付録1 品切

○昭和3年～昭和7年刊
○別冊＝解説（紅野敏郎）・総目次・索引
○付録＝『女人大衆』36冊
○A5判・並製・函入・総9、400頁
○本体揃価格＝150、000円

すべて女性の手になる女性の雑誌として発刊された本誌は、多くの女流作家を世に送り出すとともに、婦人の文化的・政治的啓蒙誌として重要な役割を果たした。

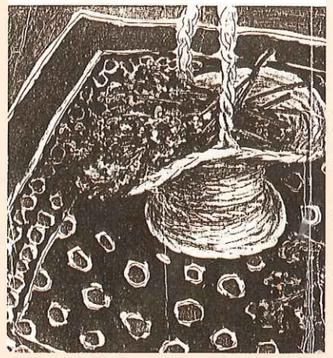
長谷川時雨＝主宰

輝ク

―全2巻・別冊1

○昭和8年～昭和16年刊
○第一巻＝『輝ク』全一〇二号
○第二巻＝『輝ク部隊』『海の銃後』『海の勇士慰問文集』
○別冊＝回想（若林つや）・解説（尾形明子）・総目次・索引
○B5判・A5判・上製・函入・総1、278頁
○本体揃価格＝25、000円

長谷川時雨が組織した「輝く会」の機関誌である本誌は、当時のほとんどすべての女性作家・思想家・芸術家が原稿や近況を寄せ、十五年戦争下の女性文化人の状況を照らし出す。



神近市子＝主宰

婦人文芸

―全10巻・別冊1

○昭和9年～昭和12年刊
○別冊＝解説（黒澤亜里子）・総目次・索引
○菊判・上製・函入・総6、362頁
○本体揃価格＝150、000円

女性文芸雑誌が相次いで終刊になった昭和一〇年代、女性の表現の場として求められた本誌は、単なる文芸雑誌に終わらず、フェミニズムを意識した雑誌となっている。

日本キリスト教女子青年会＝刊

女子青年界

―全33巻・別冊1

○明治37年～昭和25年刊
○別冊＝解説（武田清子）・総目次・索引
○A5判・B5判・上製・総21、866頁
○本体揃価格＝748、000円

女性のための寄宿舎事業、託児所設置、婦人問題に関する調査・研究、女工・女中の生活教育などを一貫して行なった日本YWCAの活動を克明に記録。

奥むめお＝主宰

婦人運動

―全30巻・別冊1

○大正12年～昭和16年刊
○別冊＝解説（鈴木裕子）・総目次・索引
○A5判・B5判・上製・総9、938頁
○本体揃価格＝300、000円

常に生活者であり労働者である女性の立場にたち、「婦人消費組合協会」「婦人セツルメント」「働く婦人の家」設立などに尽力した職業婦人社の、女性の連帯を求めた運動の記録。

晩年の市川房枝

婦選（ふせん）

復刻版概要

全一九巻・別冊一 完結

一九二七（昭和二）年一月～一九四一（昭和一六）年八月

上製・総七、五四六ページ

A4判＝第一巻　A5判＝第二巻～一三巻

B5判＝第一四巻～一九巻

解説＝松尾尊兊＋兒玉勝子

本体揃価格＝二九万五、〇〇〇円

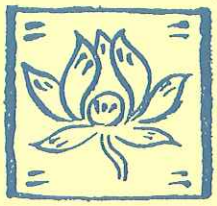
＊別冊のみ分売可

本体価格＝二、〇〇〇円

復刻版配本案内

	●原本巻数	●発行年月	●配本
第一巻	第一巻一号～第三巻一〇号 付＝「婦選獲得同盟会報」第一号～第二一号ほか一（一九二五年四月～三四年二月・四〇年八月）	一九二七年一月～二九年一〇月	第一回 一九九二年二月刊 五五、〇〇〇円
第二巻	第三巻一号～第四巻四号	一九二九年一月～三〇年四月	
第三巻	第四巻五号～一二号	一九三〇年六月～一二月	
第四巻	第五巻一号～六号	一九三一年一月～六月	第二回 一九九三年六月刊 六〇、〇〇〇円
第五巻	第五巻七号～一二号	一九三一年七月～一二月	
第六巻	第六巻一号～六号	一九三二年一月～六月	
第七巻	第六巻七号～一二号	一九三二年七月～一二月	
第八巻	第七巻一号～六号	一九三三年一月～六月	第三回 一九九三年一二月刊 六〇、〇〇〇円
第九巻	第七巻七号～一二号	一九三三年七月～一二月	
第一〇巻	第八巻一号～六号	一九三四年一月～六月	
第一一巻	第八巻七号～一二号	一九三四年七月～一二月	
第一二巻	第九巻一号～六号	一九三五年一月～六月	第四回 一九九四年六月刊 六〇、〇〇〇円
第一三巻	第九巻七号～一二号	一九三五年七月～一二月	
第一四巻	第一〇巻一号～一二号	一九三六年一月＊～一二月	
第一五巻	第一二巻一号～一二号	一九三七年一月～一二月	
第一六巻	第一二巻一号～一二号	一九三八年一月～一二月	第五回 一九九四年一二月刊 六〇、〇〇〇円
第一七巻	第一三巻一号～一二号	一九三九年一月～一二月	
第一八巻	第一四巻一号～一二号	一九四〇年一月～一二月	
第一九巻	第一五巻一号～八号	一九四一年一月～八月	
別冊	解説・総目次・索引		

＊一九三六年一月より『女性展望』に改題



●本カタログ中の表示価格は、全て消費税を含んでおりません。

●弊社は注文制です。お近くの書店にご注文ください。

不二出版

東京都文京区向丘一―二―一二―一三―〇〇二三

TEL〇三（三八一二）四四三三

FAX〇三（三八一二）四六四

振替〈東京〉六―九四〇八四

一九九二・一